

はじめに

【資料1】与謝野晶子（明治一一年へ一八七八）と昭和一七年へ一九四二）

大阪府堺市甲斐町（かいのちまう）の菓子商駿河屋に生れた。父鳳宗七（ほうしゅう）、母つねの三女。本名しよう。（中略）堺女学校補習科を卒業後、家業を手伝うかたわら、独学で古典の勉強をした。（中略）

語るべき友も少なく孤独をかこっていた晶子は、（中略）家を捨てて上京して寛のもとに走り、秋に結婚した。実家は反対し、ことに長兄の怒りは激しく生涯義絶したという。しかし、自我を貫いたその行動とともに、創作活動も燃焼し、「明星」に毎月数十首の群作を寄せ、それらを集成して歌集『みだれ髪』が成った。（中略）

明治三五年一一月、晶子は長男光（ひかる）を、三七年七月に秀（しげる）をと、計五男六女を産み、養育に苦勞した。（中略）

外遊で、西欧女性の実態を視、帰国後、婦人、教育問題などを中心に、評論活動はいっそう活潑になった。（中略）また大正一〇年の自由主義教育を標榜する文化学院創設以来、学監となり、提唱していた女子教育の実践にもたずさわった。（中略）

つぎに娘時代からの古典への傾倒が基で、源氏物語全巻の現代語訳という前人未踏の仕事に手をつけ『新訳源氏物語』全四巻（明45・2と大2・

11 金尾文淵堂）を、上田敏、森鷗外の序文を得て刊行した。これにならつて、『新訳栄華物語』全三巻（大3・7と4・3）が編まれ、さらに『新訳紫式部日記・新訳和泉式部日記』（大5・7 金尾文淵堂）『新訳徒然草』（大5・11 阿蘭陀書房）とあいついでいる。（中略）

もともと『新訳源氏物語』のあと、新しい改訳を志したが、大部の原稿を関東大震災に焼失した。寛の死を契機に再開されて、ついに『新訳源氏物語』全八巻（昭13・10と14・7 金尾文淵堂）が完成したものである。戦後たびたび公刊されて、広く晶子源氏として親しまれている。一五年五月、脳溢血で倒れ、以後静養に努めたが、一七年一月病状悪化して狭心症を伴った。五月尿毒症を併発し、二九日死去。（下略）

（日本近代文学大事典・新聞進一 1984記）

【資料2】「源氏物語礼讃」

1、桐壺

紫の輝く花と日の光おもひ合はではあらずとぞ思ふ（一九二二年）

↓下句「思ひ合はざることわりもなし」（一九三八年）

2、帚木

中川の皐月の水に人似たり語ればむせび寄ればわななく

↓四句「語ればなげき」

...

53、手習

覚めがたか夢の半かあなかしこ法の御山に程近く居る

↓ほど近き法の御山をたのみたる女郎花かと思ゆるなりけれ

54、夢浮橋

蛍だにそれとよそへて眺めつれ君が車の灯の過ぎて行く

↓明くれにおかしこひしきころもて生くる世もはた夢のうきはし

▽一九二二年『明星』と一九三八と九年『新訳源氏物語』掲載の本文。

↓細かい表現から一首全体に至るまで、繰り返し推敲。

一、「源氏物語礼讃」の成立

【資料3】晶子と『源氏物語』

明治十一年（一八七八） 誕生。

明治二十二年（一八八九） 一一歳

『源氏物語』を読みはじめる。

*紫式部は私の十一二歳の時からの恩師である。私は廿歳までの間に「源氏物語」を幾回通読したか知れぬ。（『光る雲』一九二八年）

明治三四年（一九〇一） 二三歳

与謝野寛（鉄幹）と結婚。『みだれ髪』出版。

明治四〇年（一九〇七） 二九歳

閨秀文学会で『源氏物語』を講義。

明治四二年（一九〇九） 三一歳

実業家小林天眠（政治）の依頼で、『源氏物語』の「講義」に着手。

*百ヶ月計画で毎月原稿料を支給される。

明治四五年〓大正元年（一九一一） 三四歳

『新訳源氏物語』出版。鉄幹を追い、パリへ。

大正六年（一九一七） 三九歳

小林逸翁（一三） 邸を訪問。上田秋成「源氏物語短冊屏風」を見たか。

大正八年（一九一九） 四一歳

年末に「源氏物語礼讃」（以下「礼讃」）を詠み、屏風にする（A）。

大正九年（一九二〇） 四二歳

正月に小林逸翁へ「礼讃」短冊（B）を贈る。*逸翁美術館蔵。

三月に小林雄子（天眠妻）へ「礼讃」短冊（C）を贈る。*歴彩館蔵。

大正一〇年（一九二一） 四三歳

鉄幹等と文化学院を創立。

大正十一年（一九二二） 四四歳

『明星』に「礼讃」活字化。

大正十二年（一九二三） 四五歳

六月、「礼讃」折帖（D）を揮毫。*鶴見大学図書館蔵。

八月、「明星」に「礼讃」の広告。

九月、関東大震災で「講義」原稿が焼失。

大正十三年（一九二四） 四六歳

歌集『流星の道』に「礼讃」活字化。

昭和六年（一九三一） 五三歳

小林天眠（政治）へ「礼讃」懐紙（E）を贈る。*歴彩館蔵。

昭和九年（一九三四） 五六歳

『冬柏』に『新新訳源氏物語』の広告が掲載。

昭和十三年（一九三八） 六〇歳

『新新訳源氏物語』出版。*各巻頭に「礼讃」色紙の写真が掲載。

昭和十四年（一九三九） 六一歳

『新新訳源氏物語』完成祝賀会。*「礼讃」短冊など（F）を頒布。

【資料4】大正九年（一九二〇）一月二五日付小林逸翁（一三）宛晶子書簡

①さて先年うかゞひ候せつ拜見いたし候ひし秋なりの源氏の屏風、うらやましく存じ、いつかは自分も試みてまじとおもひ念じ候ひしが、②去年のくれにある人せひ五十四帖をうたにせよと申され、やうやく三十日の朝すてにより上げ候ひしもの、③そのうちいく度もうたをかへ、なるべく完全にと心がけ候ひしが、お目にかくるもはづかしからぬまでに自信もでき候ひしかば、私の源氏のうたもまた御手許へとゞめさせ給へとてさし上げ候。これは人のふるきごと好みと申すべく候へば、④活字にはいたさず候。遺稿をあつめ候せつ御しめし下されたく候。

①「先年」、逸翁邸で上田秋成の「源氏の屏風」を見て「うらやましく」。
↓「いつかは自分も」と思っていた。

②「去年」⇨大正八年（一九一九）末に「ある人」が五十四帖の歌を依頼。

※与謝野秀『縁なき時計 続欧羅巴雜記帳』（采花書房、一九四八年）

「大正七、八年頃のことであろうか」、「中央公論の瀧田樗蔭氏が家を訪れられた。」「明後日の晩に取りに来るから、それ迄にこの屏風に源氏五十四帖の歌を書いて呉れ」と言われ、大晦日の晩に完成。

↓瀧田樗蔭の依頼が直接の契機に。「礼讃」は三日ほどで仕上げられた。

※A、この屏風は現蔵者未詳。

③推敲を重ね、大正九年（一九二〇）一月末に逸翁に短冊を送付。

※B、この短冊は逸翁美術館に現存。

④「礼讃」を活字にするつもりはない。

【資料5】大正九年（一九二〇）三月一日付小林雄子（天眠妻）宛晶子書簡

⑤九条武子様にも、その前に源氏五十四帖のうたをおく様へと同じものしたくめて上げたたく存じ居り候。⑥おく様へのは（中略）たんざくにいたし、いつぞやの小林一三（⇨逸翁）様の屏風のやうにして頂かんと存じ候。かの方にだけは先づたんざくにかきて上げ候に、恐縮いたすほどおよろこび下され候。⑦あとより気に入らぬうたをかへ、今はやく完全になりしやうにおもひ居候へど、書いて見候ハゞまたいかに思はれ候べき。

⑤小林雄子（天眠妻）だけでなく、九条武子（歌人）にもあげたい。

※C、実際にあげたのか、それが現存するのか未詳。

⑥この時期の晶子は屏風にも貼れる短冊を好む。

⑦逸翁にBの短冊を贈った後、さらに推敲を重ね「やく完全」になった。
↓しかし、また書き付けて見たら改作したくなるかもしれない。
↓実際に「柏木」巻の歌が差し替えられた。

二、「源氏物語礼讃」の活字化

【資料6】大正十一年（一九二二）一月 第二次『明星』一卷三号
巻頭に「源氏物語礼讃／与謝野晶子」として掲載。

↓逸翁には活字にしないと言っていた（資料4④）が、方針転換。

【資料7】大正十二年（一九二三）八月 第二次『明星』四巻二号の広告

⑧空前の一大歌帖／全一卷、桐箱入／高島屋特製／唐織表装／価参百五拾円／送料不要（中略）

⑨茲に唯だ一卷のみを特に同好の鑑賞に供します。希望の方が二人以上ある時は、第一着の申込者に譲ります。

⑧「特製」の「一大歌帖」を「参百五拾円」で販売。

⑨先着順で「唯だ一卷のみ」の限定品。

※D、鶴見大学図書館（箱書「大正十二年六月」）のもの？

【資料8】大正十三年（一九二四）五月『流星の道』に掲載。

【資料9】昭和六年（一九三一）八月に晶子、京阪・奈良を旅行。

↓天眠文庫蔵「歌帖」の箱書「昭和六年夏日 加茂川のほとりにて与謝野晶子しるす」。天眠が折帖にした（『与謝野晶子と小林一三』）。

※E、当初は懐紙。歴彩館蔵。

【資料10】昭和十四年（一九三九）九月「新新訳源氏物語完成記念祝賀会」
 「源氏の歌」を揮毫。短冊は一枚五円。歌巻物は一卷百円（百巻限定）。
 「少数」は「別仕立」として二百円。

※F、「巻物」は堺市博等に現存。「別仕立」は屏風（神戸親和女子大蔵）

三、鶴見大学図書館蔵「源氏物語礼讃」二種

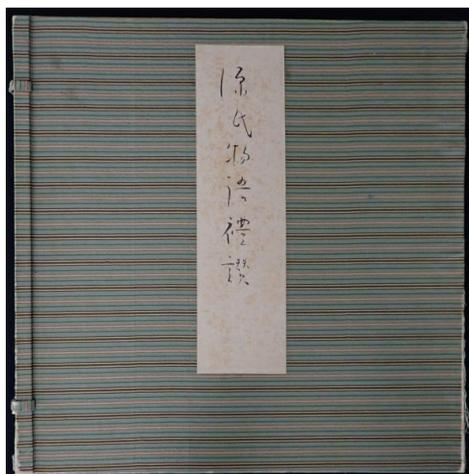
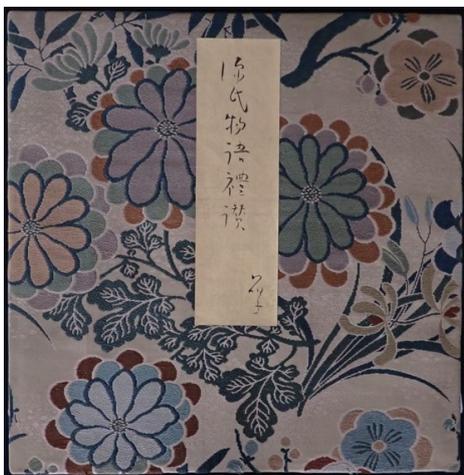
【資料11】ひとつめの書誌

登録番号、1408639。折帖一帖。

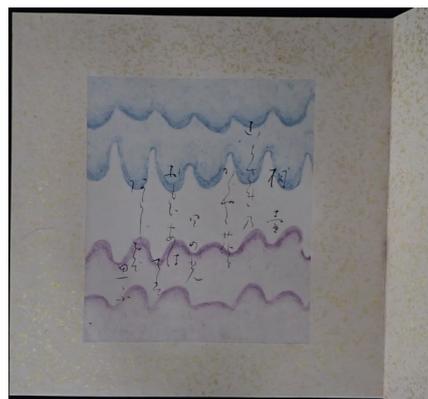
色紙、縦二一・一糎×横一八・〇糎。上青下紫の雲紙。礼讃の五四枚に加え、冒頭に「源氏物語礼讃」、巻末に「与謝野晶子」の各一枚。

折帖、縦三〇・五糎×横三〇・〇糎×高さ四・〇糎。菊花紋を織り出した絹表紙に、金の題簽を貼った豪華な装訂。台紙は金揉箔散らし。小口も金帙、縦三一・〇糎×横三〇・五糎×高さ四・七糎。裏地は金揉箔散らし。

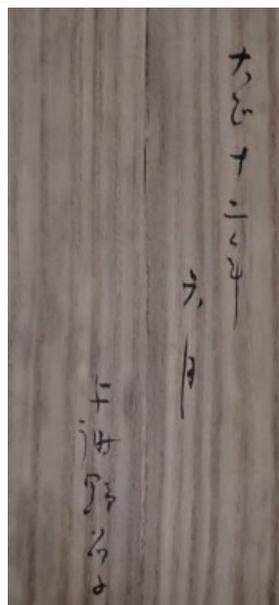
桐箱、縦三四・一糎×横三三・八糎×高さ七・一糎。蓋の表の中央に「源氏物語礼讃」と墨書（自筆）。蓋の裏の右端に「大正十二年／六月／与謝野晶子」と墨書（自筆）。



（上）折帖の表紙 下（帙）



（上）桐壺巻の礼讃 下：箱書（蓋の裏）



【7再掲】大正一二年（一九二三）八月 第二次『明星』四巻二号の広告

空前の一大歌帖／全一卷、桐箱入／高島屋特製／唐織表装／価参百五拾円

／送料不要（中略）

自ら之を色紙に書して、優麗高雅なる装幀に由り、方一尺二寸の大歌帖に

製したるもの、茲に唯だ一卷のみを特に同好の鑑賞に供します。

・全一帖で、「全一卷」と対応。

・折帖は約三〇糎四方だが、桐箱は「方一尺二寸」（約三六糎四方）に近い。

・「桐箱入」や「唐織表装」とも一致。

↓『明星』の広告のとおりなら「唯だ一卷のみ」で類似品はないはず。

【資料12】前年の『明星』、翌年の『流星の道』の本文と比較

けざやかにめでたき人ぞいましたる野分が開くる絵巻の奥に（明）

けざやかにうつくしき人ぞいましたる野分があくる絵まきのおくに（鶴）

けざやかにめでたき人ぞいましたる野分が開くる絵巻の奥に（流）

↓もっとも大きく異なる野分巻でも、この程度の違い。

↓箱書「大正十二年六月」は信頼できる。

【資料13】ほかの折帖

・天理図書館蔵の折帖。

↓正宗敦夫へ贈ったと箱に明記されており、『明星』広告とは無関係。

・さかい利晶の杜蔵の折帖。

↓上下二帖。縦二八・〇糎×横二四・五糎×高さ八・〇糎。

(「さかい利晶の杜 収藏品DB」参照)

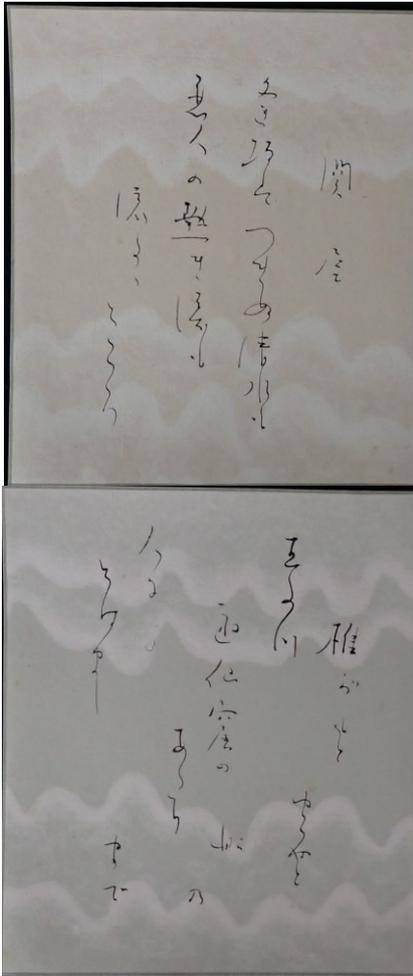
↓「全一卷」「方一尺二寸」(約三六糎四方)と矛盾。作成時期も不明。

★現在知られる中では鶴見大学図書館蔵の折帖が「一大歌帖」に近い。

【資料14】もうひとつの鶴見大学図書館蔵「源氏物語礼讃歌」

登録番号、1403901。色紙(緑・黄・桃・紫色などの色替わり。白い打曇)。五五枚(礼讃五四枚+「源氏物語礼讃/与謝野晶子」の一枚)。縦二一・三糎×横一八・二糎。書写年は未詳。こちらも新出。

桐箱、縦二四・一糎×横二一・〇糎×高さ四・三糎。蓋の表の中央に金字で「源氏物語禮讃」、左下に「与謝野晶子」(それぞれ晶子自筆)。



(上::関屋、下::椎がもと)

【資料15】歌の特徴

さめがたかゆめの半かおぼつかな法の御山にほど近くみぬ(手習)

ほたるだにそれと思ひてながめつれ君が車の灯のすぎてゆく(夢浮橋)

↓昭和八年(一九三三)改造社版晶子全集所収『流星の道』まで一致。

春の川遊仙窟のあたりまでゆくやと船の人にとはまし(椎本)

※あけの月涙のごとく真白けれ御寺の鐘の水わたる時

↓「大正己未」(一九一九。「己未」は誤記か)の天理図書館蔵の折帖。

昭和六年(一九三一)の天眠宛て懐紙としか一致しない。

↓一九二〇〜一九二四、一九三九年の礼讃では※の歌。

▽結局、歌の相違だけでは、一九二二〜三三年程度までしか絞り込めない。

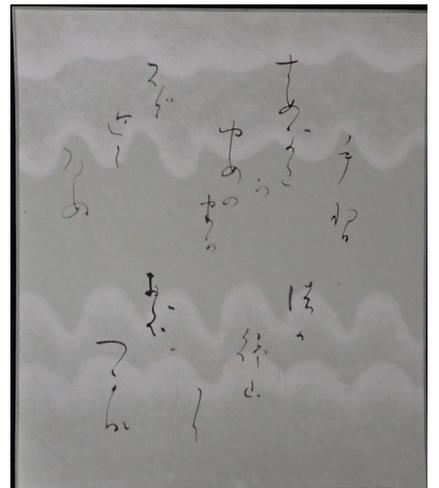
【資料16】表現の特徴

亡きひとの手のなれの笛によりもこしゆめのゆくへのさむき秋の夜(横笛)

↓五句は大正九年(一九二〇)の逸翁宛て短冊のみ。

おふけなき大御女をいにしへの人に似よとも祈りけるかな(宿木)

↓五句は大正九年(一九二〇)短冊、昭和六年(一九三一)懐紙のみ。



(上::手習、左下::箱)

▽細かい表現まで見ても、鶴見の色紙と一致率の高いものは見当たらない。

↓鶴見の色紙には改作前と後の本文が少しずつ混ざっている？

*横笛・宿木は古い表現、夕顔・総角は新しい表現に一致。

【資料17】この色紙の独自の本文

逢坂はつきぬ清水も恋人の熱き涙も流るゝところ（関屋）

*二句「関の清水も」

火の国に生ひいでたればきくことの皆はづかしく頬のそまるかな（玉鬘）

*三句「いふことの」

身にしてみてもを思へと初夏のほたるほかに青ひきてとぶ（螢）

*三句「夏の夜の」

二ごゝろ誰先づもちて悲しくもさびしき世をばつくり初めけん（若菜下）

*三・四句「さびしくも悲しき世をば」

↓須磨・松風・少女・野分・東屋・夢浮橋にも独自異文が。

おわりに

○鶴見大学図書館蔵の折帖は『明星』で宣伝されていた品と見られる。

↓「唯だ一卷のみ」のつもりで作った晶子にとっても特別な品。

○鶴見大学図書館蔵の色紙は本文に特徴がある。

↓制作年は未詳ながら、従来知られていなかった本文が複数ある。

「お知らせ」

鶴見大学 日本文学科・源氏物語研究所編『与謝野晶子が詠んだ源氏物語

―鶴見大学図書館蔵『源氏物語礼讃』二種―』（花鳥社、二〇二四年）

*今回紹介した二種類のカラー図版と翻刻・解説。

〔依拠本文〕

・逸見久美編集代表『鉄幹晶子全集』（勉誠出版、二〇〇一〜二二年）

・市川千尋『与謝野晶子と源氏物語』（国研出版、一九九八年）所収「資料

「源氏物語礼讃」

・伊井春樹監修『与謝野晶子と小林一三』（逸翁美術館（図録）、二〇一一年）

・植田安也子・逸見久美『與謝野寛 晶子書簡集 天眠文庫蔵』（八木書店、

一九八三年）

・逸見久美『与謝野寛晶子書簡集成』（八木書店、二〇〇一〜三年）

〔注釈〕

・西田禎元『源氏物語』の光と影』（新典社、二〇二〇年）所収「与謝野晶

子の「源氏物語礼讃」歌」（初出一九九九年三月〜二〇〇〇年三月）

〔主な先行研究〕

・新聞進一「与謝野晶子と「源氏物語」」（『古代文学論叢6 源氏物語とその

影響 研究と資料』武蔵野書院、一九七八年）

・ゲイ・ローリー「与謝野晶子の「源氏物語礼讃」―宇治十帖の歌を中心に―

（目白近代文学7、一九八七年三月）

・市川千尋『与謝野晶子と源氏物語』（国研出版、一九九八年）所収「与謝野

晶子「源氏物語礼讃」の成立事情―小林一三宛未発表書簡をめぐって」（初

出一九九二年六月）

・伊井春樹『与謝野晶子の「源氏物語礼讃歌」』（思文閣出版、二〇一一年）

・辻憲男「与謝野晶子の源氏物語礼讃」（神戸親和女子大学言語文化研究11、

二〇一七年三月）

・伊井春樹「与謝野晶子の『新訳源氏物語』から『新新訳源氏物語』へ―

「源氏物語礼讃歌」詠作の背景と意義」（文学・語学219、二〇一七年六月）

・神野藤昭夫『よみがえる与謝野晶子の源氏物語』（花鳥社、二〇二二年）